

---

# 「少女」「祈り」「リストカット」

二三川廉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「少女」「祈り」「リストカット」

### 【Zコード】

N3707Q

### 【作者名】

一三川廉

### 【あらすじ】

男が休暇取つてのんびりする話

(前書き)

深夜に一時間で書き上げようとした三大嘶。ヤマ無しオチ無しトイ  
無し。添削も無し。

都心を車で出発してから、早数時間。辺りの景色が、地味な白や灰色から緑一色に変わった頃、私は車を停めた。ここまで、給油以外の休憩も取らずに走つて来たのだ。煙草の一本くらい吸わせて貰わなければ、先に心が疲弊してしまう。車の窓を開けると、涼しい風が私の髪を撫でた。都会に慣れてしまったこの体には、今回の旅行はいい薬になるだろう。

今日から数日間、私は、この山を越えた先にある村の世話になる。雑誌やニュースに載るような特徴は無い村ではあるが、逆にそれが私の心をくすぐつた。何も無い村で、何もせずに過ごす。その方が、私に取っては気楽でいい。吸殻を灰皿に捨て、私は再び車を走らせた。

「はあ……その旅館でしたら、あちらの道を曲がれば看板が見えるはずですよ」「ああ、あそこですね？　ありがとうございました」  
村に入つたはいいが、都会では一生かかつても拌めないであろう、自然に溢れた風景に熱中し過ぎたせいか、私は道に迷つてしまつた。田んぼで農作業をする初老の男に声をかけ、何とか旅館への道を確保した次第だ。

「観光ですか？」

「え？……あ、はい」

別れ際に突然聞かれたものだから、つい間を空けて答えてしまつた。

「そうですか。それはいい時期に来られましたね……」

初老の男が笑う。私も笑みを返そうとしたのだが、何故か固まってしまった。初老の男の笑みに、何か得体の知れぬ悪意を感じたのだ。まるで、餌を前にした獣のような何かを。男が私に背中を向けて田んぼに去るまで、私は車を出す事ができなかつた。

旅館で遅目の昼食を取り、私は部屋へ案内された。壁や天井、畳にまでシミの目立つ部屋だったが、今はとにかく長時間の運転で疲れた体を癒しておきたかった。窓から見える景色は緑一色。何も面白味の無い村だが、それだけに、私はこの旅行が面白くなっていた。道を聞いた男の顔に見た悪意など、既に私の頭からは消えていた。

しばらくは、部屋に置いてあつたこの村のパンフレットを読んでいたのだが、迫り来る睡魔に、私の意識は掠め取られてしまったようだ。気がついた時には、既に夕食の時間になつていた。野菜料理が中心の食事。質素ではあるが、私は満足だった。どうも、今旅館に泊まっている客は私一人らしく、広い和室に一人という実に不格好な形での食事となつた。

旅館の女将から聞いた話によると、今夜、村の神社で祭があるようだ。何でも、村の結束を固め、今後の繁栄を祈る儀式が行われるらしい。余所者の私が参加しても構わないかと聞いてみた所、村の中にいれば村の一員だとの事だ。今夜は、退屈しなさそうだ。

もう辺りは暗くなつていて、それに比例するかのように、集まつた村人の熱気は高まっていた。儀式が行われるらしい神社の舞台では、三人の女性が大きな鍋で何かを煮込んでいた。どうも、儀式の後に村人全員に振舞うらしい。

そうこうしている内に、舞台から女性達が降りる。同時に、奥から一つの人影が現れた。私は息を飲んだ。儀式と言うので、老人が舞台で祝詞を上げるとばかり思っていた。現れたのは、まだ年端も行かぬ少女ではないか。案内役の女将に聞くと、舞台に現れた少女は、この村の村長の孫に当たるらしい。

巫女装束を纏つた少女は、無表情で歩み、先程から湯気をたてている鍋の前で足を止めた。少女が祝詞を上げる。透き通つた美しい声。私は、この旅行にカメラを持って来なかつた事を後悔した。長台詞を終え、少女は両腕を前に突き出す。私は眉を寄せた。少女の

右手には、包丁のようや物が握られていたのだ。

「今、この村が、一つになります」

その言葉を終えると共に、少女は、右手の包丁を自分の左手首に突き立てた。傷口から流れる血が、何滴も何滴も、煮えた鍋の中に落ちていった。数秒間、私は驚愕で固まっていた。これが村の儀式？ 村長の孫の血が混ざった鍋を、村人全員で食べるのか？ 想像しただけで、嘔吐感が込み上げて来る。そして、無表情のまま目の前で自傷行為を続ける少女。歎声をあげる村人。その異様な光景が、私に更なる恐怖を駆り立てた。あまりの恐ろしさに逃げ出そうとしたその時、私の腕を何者かが掴んだ。女将だった。夕食時の彼女の言葉が思い返される。今のは村の一員。逃れる事は、できない。少女はしばらく鍋に血を入れた後、裏手へ消えて行つた。今は、最初に鍋を煮ていた三人組が、一人一人に配つている所だ。私の手にも、皿が強引に掴ませられた。赤く濁つたお湯の中に、数種の山菜。周りの皆は既に飲み始めている。恐らく、鉄の味がするであろう、この鍋料理を。

村人達が私を見詰めている。飲んでいないのはお前だけだと、そう語るように。私は、意を決して器の中身を全て口の中に搔き込んだ。そして、鼻の奥に突き刺さる鉄の臭いに咽せ返り、その全てを、ついでに、先程戴いた夕食の残骸を、地面上に吐き出した。咽せる私を介抱する者はいない。寧ろ、顔を上げた時には、冷たい視線が私を取り囮んでいた。

これは、村の結束を固める儀式。少女の血を拒んだ瞬間、私は完全に余所者になつたのだ。女将すら私を睨んでいる。

逃げ道を失つた私を迎えたのは、全身に走る痛み。村人達からの、凄絶な迫害だった。

(後書き)

深夜のテンションだと、いつなる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3707q/>

「少女」「祈り」「リストカット」

2011年1月23日22時40分発行